

ゴーギャン (1848 年～ 1903 年) の絵はあまり好きではない。それは、タヒチを描いたものも、くすんだ色使いになっていて、せつかくのタヒチというイメージにそぐわない気がするからだ。とはいっても、私はタヒチには行ったことがないので、こちらが勝手に想像を膨らませている、「南洋の楽園の島」を彷彿させるような鮮やかな色ではないということだけが。

しかし唯一の例外、彼の絵で気になるのは、「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」だ。まずその題名に惹かれる。絵そのものの解説は、故田中元理事長のご遺族が寄贈された「ゴーギャン展」(2009 年、国立近代美術館/NHK) のカタログに、ゴーギャン自身が語ったこの絵を描いた動機、さらに専門家によるこの絵の部分部分の解説もあるので、興味があればこのカタログを参照して欲しい。このカタログでは説明されていない部分、暗い後ろの方にぼんやりと描かれた部分、絵の右に半身だけを取り出した犬などにも、きっとゴーギャンはいろいろな意味と想いをこめていたのだろう。

あまり美術展などには動かない私も、2009 年の秋、竹橋の東京国立近代美術館で開催された「ゴーギャン展」には行って (同じ時期に上野の国立博物館で公開された奈良・興福寺の「阿修羅」は見に行かなかった)、上のカタログばかりか、クリアファイルや「我々は何者か T シャツ」などのゴーギャン・グッズまで買ってしまった。腰の重い私が出かけたのは、自分のホームページのある部分にこの題名を拝借しているので (少し順序は変えたが) ゴーギャンに敬意を表すという意味もあったし、なによりも本物をその大きさのまま (139.1cm × 374.6cm の大作) で見てみたいという気があったからだ。そして実物を見て、この展覧会は行っておいてよかったと思った。

絵の題名、「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」は、ゴーギャン個人の苦悩の表現のみならず、我々人類個人みんなが持っている根源的な問いを端的に表したものだと思う。そしてこれは、「自分はどう生きるか」という問いかけにもなっているはずだ。

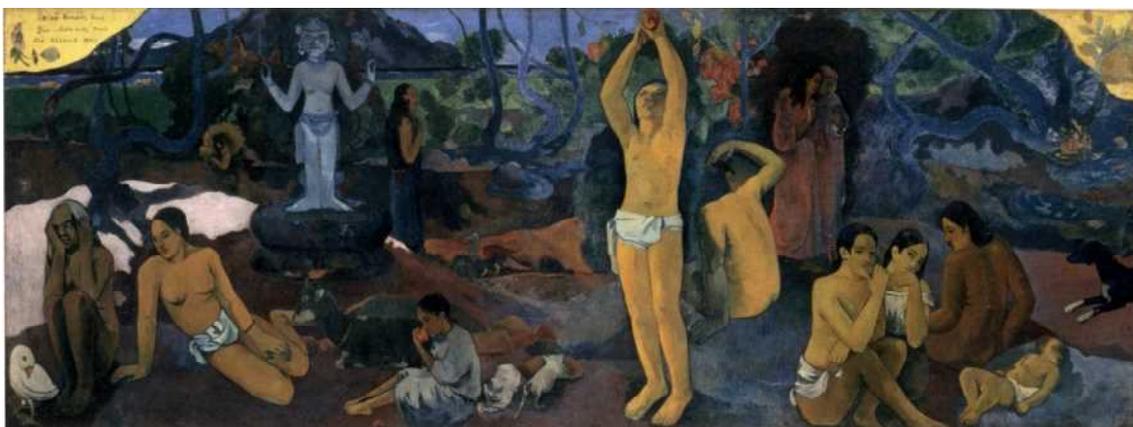
すべての科学は結局、この問いにいかにか答えるかを動機にしているのだと思う (実際、これを自覚している科学者は多い)。つまり、かつては「神話・宗教」がこの答えだったはずだが、いったん「神話・宗教」に疑問を持ち出すと、もうそれは無謬という建前で批判を許さない「神話・宗教」では満足できなくなってしまう。確たる証拠に基づいて宇宙と地球、物質と生命の仕組みを解読して宇宙の全歴史を組み立て、その中で人類の位置を確認する、その試行錯誤が科学だと思う。

だが、科学はその答えを見いだすことができるだろうか。拙著「地球について まだわかっていないこと」のまえがきで、私は、『科学の発展を振り返ってみると、何かがわかったとすると、そのわかったことがさらに新しい疑問を生む、そしてそれが解決すると、それがまたさらなる疑問を生むという繰り返しだったと思います。つまり無限の追いかっこのように見えます。そうであるなら、アキレスとカメのように、アキレス (われわれ) はカメ (真理) にだんだん近づいているのでしょうか。それとも、追えば追うほど新しい疑問は大きく深くなって、真理はますます遠ざかっていくのでしょうか。』と書いた。

2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震、それによって引き起こされた福島第一原発の重大事故のときによく使われた「未曾有」「想定外」という言葉は、まだまだ私たちはいろいろなことを知らなすぎるという事実を自覚したものだと思う（ものであってもらいたい）。

道はまだまだ遠い。遠いどころどころか、人類には到達が許されていないゴールである可能性が高い。だが、わかっていることがいかに多いかということは、よくわかってきた。例えば、この宇宙に占めている通常の物質（クォーク（さらには「ひも」かもしれない）を最小構成要素とする物質）の割合はわずかに4%でしかないこと、残りの26%がダークマター（暗黒物質）、さらに残りの70%がダークエネルギー（暗黒エネルギー）であるということがわかってきた。「ダーク（暗黒）」とは、要するにまだまったく正体不明だということだ。でも、逆に考えれば、わからないことがこれだけ多いということもわかってきたということでもある。たった4%のわかっているものだけでは（これだってまだ完全にわかっているわけではない）、とうてい「我々は何者か」の答えは出てこないだろう。そして、もし将来、ダークマターやダークエネルギーの正体がわかったとしても、それはきっとさらなる新しい疑問を生むものだと思う。

でもこれまでの人類の歴史のなかで、学者だけではなく、学者を支えた技術者・職人、さらに彼らを支えた生産者・流通者、さらに社会を構成し、歴史を作ってきた名もない多くの人たちによって、ほんの少しだけかもしれないが、わかってきたこともある。この「わかったこと」、つまり人類がこれまでに蓄積した「知」を、効率的に後世に伝える場（組織）が学校だと思う。そこで教える立場としては、本当はまだ我々は何も知らないという自覚を忘れないでいたいと思う。もう、私には残り少ない期間ではあるが。



我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか（1897年/1898年）  
<http://www.mfa.org/collections/object/where-do-we-come-from-what-are-we-where-are-we-going-32558>（ボストン美術館）